

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

2022 Mar.

第117号

発掘調査
整理遺跡
紹介

金屋遺跡 丘江遺跡 新町遺跡

企画展・少年少女考古学教室 わが町の文化財 見附市



少年少女考古学教室
拓本体験 2021.12



2021年度 発掘調査 遺跡の紹介

金屋遺跡 平安時代の遺跡

所在地：南魚沼市余川字金屋道上

金屋遺跡は、魚沼丘陵東麓にある蟻子山の東裾に広がる大きな遺跡です。庄之又川によって形成された標高約194mの扇状地に立地します。

発掘調査は昭和57（1982）年に関越道自動車道建設に伴って初めて行われ、古墳時代と平安時代の時期に集落が営まれていたことがわかりました。近年は、国道253号八箇峠道路建設に伴って発掘調査を実施しています。

今年度の調査は2地点で延べ2,320㎡を発掘し、平安時代（中心時期は9世紀前葉～中葉）の掘立柱建物・竪穴建物・土坑・畝状小溝などの遺構や集落の中を流れる川跡が見つかりました。

掘立柱建物は5棟以上、竪穴建物は2棟見つかりました。集落は、掘立柱建物が数棟と竪穴建物1棟のまとまりで建物群を形成していると推測されます。北東側一画の建物群は、掘立柱建物と竪穴建物が同じ向きに揃って建てられ（写真1）ていて、建物群の南東側で見つかった土坑からは緑釉陶器（写真2）、帯金具の鉸具（写真3）など

の稀少な遺物や底面に「昨女」と墨書された土器（写真4）が見つかりました。昨年度の調査でも建物群の上層面から石製腰帶具や鉄製の馬具が出土しています。これらの出土遺物から北東側の建物群は、有力者の関わりが深い遺構と考えられます。

遺物は土器、鉄製品など出土しました。出土した土器は、須恵器の食膳具が多く割合を占めています。墨書土器は、先述の「昨女」と記されたものが3点見つかり、昨年の調査でも「昨女」と読めるものが複数出土しています。読み方は「サクメ」あるいは「クイメ」と考えられます。文字の意味は人名、地名などと考えられますが、この遺跡と深く関わる文字とみられます。鉄製品は糸を撚る道具の紡錘車、鍛冶関連の鉄滓・轆の羽口が出土していて、集落内で紡績、鍛冶などの作業があったことを示すものとして捉えています。

（飯坂盛泰）

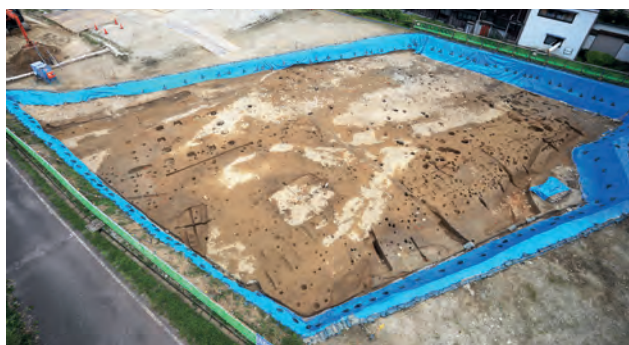


写真1 北東側の建物群



写真2 緑釉陶器の出土状況



写真3 鉸具の出土状況



写真4 「昨女」と記された墨書土器



2021年度 発掘調査 遺跡の紹介

丘江遺跡

所在地：柏崎市田塚3丁目字丘江ほか

丘江遺跡は柏崎平野の中央西寄り、鯖石川左岸の沖積地に位置し、標高は6～7mです。発掘調査は一般国道8号柏崎バイパス建設事業に伴い、平成26年から継続して行われています。これまでの調査では、多数の建物や井戸、区画溝などの居住域に加えて水田区画も発見されており、鎌倉～室町時代（中世）の集落の様子が明らかになってきています。遺跡からは優品や茶道などの文化的な生活が窺える遺物が出土しており、有力者の存在が想定されています。中心となる時代以外でも縄文時代から江戸時代（近世）にかけて幅広い時代の遺物が出土しており、長期間に渡って断続的に人々が生活したことが分かってきました。

今年度の調査は令和3年8月～11月に実施しました。調査面積は1,660㎡で、昨年度までの隣接範囲を調査しました。丘江遺跡では、近世の地層（Ⅰ層）と中世の地層（Ⅱ層）が確認されており、今年度の調査においても2種類の土層の堆積が確認されました。見つかった遺構は、掘立柱建物、井戸、土坑、溝等で、遺構の中に堆積する土がⅠ・Ⅱ層のどちらに由来するのか確認して各遺構の年代を推定し、集落がどのように変遷したのかを検討しています。

集落を構成する遺構のうち、数の多い柱穴は、今年度の調査で677基見つかりました。この約6割にあたる401基が調査区の東端部（①東地区）に集中しています（写真1）。遺構の年代は、中世だけではなく、その後の近世にかけてのものが多



写真1 遺構完掘状況（①東地区）

く含まれることから、①東地区では、時代が移り変わっても建物の建て替えが繰り返されていた様子が窺えます。これに対して調査区の西側は柱穴や井戸などが希薄な場所があり、同じ集落内でも場所によって役割や性格が異なると考えられます。

出土遺物は少量ながらも種類が豊富で、中世では青磁、白磁、瀬戸・美濃焼、珠洲焼、越前焼、土師質土器があり、江戸時代の肥前系陶磁器が含まれます。石器・石製品では硯、石臼、砥石、木製品では漆器椀、箸、曲物、柱材、礎板、杭、井戸側部材、鉄製品関連では鉋、釘、羽口、鉄滓が出土しました。

特筆すべき遺物としては、中世の水田跡に築かれた畦畔（あぜ）を調査した際に出土した木製板碑が挙げられます（写真2）。表面には漆と金彩によって文様が刻まれており、中央に阿弥陀如来を示す種字（キリーク）、その上下には天蓋と蓮台の表現が認められます。丘江集落の有力者を供養するために製作された可能性が考えられますが、畦畔に伏せられた状態で出土しました。供養という目的が忘れ去られた頃に、畦畔の一部として再利用されたとみられます。

以上のように、丘江遺跡は数多くの遺構や豊富な資料に恵まれており、中世・近世の生活の実態解明に様々な情報を得ることができました。更なる調査・研究の進展が期待されます。

（株式会社大石組 竹部佑介）



写真2 木製板碑



2021年度 整理報告 遺跡

新町遺跡から出土した中世の井戸側部材

所在地：阿賀野市百津字新町

新町遺跡は、阿賀野川の右岸にかつてあった旧百津潟のほとりに位置します。阿賀野バイパス建設に伴い2014年度に行った第1次調査では、長さ約200m、幅約40mの範囲から15世紀後半を中心とする屋敷跡が見つかりました。遺跡の中央を東西に走る幅約20mの道を基軸として、道の両側から掘立柱建物9棟、井戸97基が確認されました。

2021年度の第2次調査では、第1次調査範囲の北東側に沿って長さ約140m、幅約2mの範囲を調査しました。その結果、井戸5基、土坑3基、ピット13基、溝3条が見つかりました。現在、調査を委託した（株）吉田建設・（株）帆苺組・小柳建設（株）特定共同企業体の事務所で整理作業を行っており、その様子について紹介します。

遺構の中で注目されるのは、大型井戸から出土した大量の井戸側部材です。井戸は上端長径3.95m、深さ3.64mの穴の底に水溜め用の曲物を設置し、その上に土溜め用の縦板を方形に並べ、内側に棧木を組み、上下の棧木の間に支柱を立てて支えたものです（方形縦板組支柱横棧留型）（写真1）。井戸側



写真1 井戸側出土状況

は一辺約94cmで、阿賀野市内で見つかった中世の井戸のなかでは大きな部類に入ります。

出土した井戸側部材は縦板110点、棧木17点、支柱15点に上ります。これらを観察したところ、同一の木材から分割されたものが含まれることが分かりました。そこで、部材同士を接合した結果、縦板2個体、棧木5個体、支柱5個体を分割前の状態に復元することができました。棧木4点が接合した個体は長さ94.5cm（3.1尺）、幅15cm（5寸）、高さ11.4cm（3.8寸）になります（写真2上）。表面や側面には鉋で平坦に加工した痕が明瞭に認められます（写真2下）。これは同じような接合個体が多数出土した阿賀野市境塚遺跡の分析結果を参考にすると、丸太材を適切な長さに分断したものを半割やミカン割にし（大割）、さらに細かく台形状に分割して（中割）、鉋で表面を整え角材にしたものに該当します。端が鋸で切断されているため、本来は倍以上の長さであったと考えられます。この角材を4等分に分割し（小割）、鋸や鑿で仕口を作り棧木に仕上げました。

中世では、こうした規格性の高い角材が流通していたと考えられ、接合部材は当時の木材利用を考えるうえで重要な鍵となります。今後の新町遺跡の分析に期待が寄せられます。（荒川隆史）



写真2 接合した棧木（上）と側面の加工痕（下）



埋文
インフォ
メーション

令和4年度 企画展1 地味にすごい！下越の縄文時代 4月22日から開催します

新潟の縄文といえば信濃川上中流域（中越）の火焰型土器、糸魚川（上越）のヒスイが全国的に有名です。一方、下越にも魅力的な縄文時代の遺跡が多数ありますが、意外とそのすごさが知られていません。各自治体（村上市、胎内市、阿賀野市、阿賀町、新潟市）と連携して、個性豊かな下越の縄文時代に迫ります。

会 期 令和4年4月22日（金）～9月25日（日）
時 間 9：00～17：00
会 場 新潟県埋蔵文化財センター
休館日 期間中はなし
観覧無料
関連講演会も予定しております。
最新情報はHPでご確認ください。

少年少女考古学教室（全4回）！ －令和3年度の活動と令和4年度の募集について－

全4回の活動を通して、本物の縄文土器に触れ、遺跡を発掘し、土器作りなどの体験をして、学習の成果をポスターにまとめて学びを深める少年少女考古学教室。

令和3年度は、小学4年生～中学1年生の計15名が参加し、写真のような活動をしました。



第1回 土器作り体験



第2回 発掘体験



第3回 アンギン編み



第4回 まとめポスター作り



展示会 12月6日～1月10日 新潟県埋蔵文化財センター



★令和4年度 少年少女考古学教室について

令和4年度も、充実した活動となるよう計画中です。もちろん発掘体験も行います。

地域や学年の違う仲間たちと一緒に、考古学者を目指しましょう！

日程 第1回 7月3日（日）9：30～15：00
「縄文時代はどんな時代？」
第2回 8月4日（木）9：15～16：30
「遺跡に行こう！」
第3回 10月9日（日）9：30～15：00
「縄文人の技を体験しよう！」
第4回 12月4日（日）9：30～16：00
「学んだ成果を伝えよう！」
※展示会 12月5日～1月9日

対 象：小学4年生～中学3年生の16名（先着）
条 件：全4回に参加する方。参加費無料。
申込期間：5月9日（月）～6月30日（木）。
申込方法：氏名・学年・住所・電話番号を添えて
当センターまでお申し込みください。

メー ル：niigata@maibun.net
電 話：(0250) 25-3981
F A X：(0250) 25-3986



埋文 コラム

古代の火起こし道具

古代の火起こし道具「火鑽臼・火鑽杵」

火鑽臼ひきりうすと火鑽杵ひきりぎねは木製の発火具です。火鑽臼は板状で平らな面に切れ込みと穴があるもの、火鑽杵は棒状で先端部が丸く焦げ付いたものです。発火方法はシンプルです。臼の穴に杵の先端を差し込んで摩擦を起こすと、やがて炭が出てきて煙が立ち上がります。その炭に小さな火種あなができたなら、繊維などに火種を落とし、空気を送り込んで火をつけます。この形態の道具を使った火起こしの方法は諸説ありますが、火鑽杵を両手でこすりあわせる「キリモミ式」(写真1)説が有力です。

いまのところ最も古いものは縄文時代の火鑽臼です。全国的な出土傾向として、木製発火具は古墳時代が出土数のピークとなり、その後、鉄が広まるとともに火打金・火打石が主流になるそうです。ただし江戸時代になっても細々と残り続け、現代では神事などで見るができます。

さて、「火起こし道具」というと建物などの生活圏内で見つかるイメージですが、溝、河川、土坑に廃棄された状態で見つかることが多く、建物内で見つかることはあまりないようです。



写真1
キリモミ式



写真2 火起こし道具(写真3)出土状況(左)

新潟県内では、上越市延命寺遺跡じょうえつ し えんめいじ(飛鳥～平安時代)、柏崎市箕輪遺跡かしわざき しみのわ(奈良・平安時代)、糸魚川市山岸遺跡いといがた しくぼた(鎌倉・室町時代)、新潟市窪田遺跡(江戸時代)などで約90点近く見つかっています。

中でも注目されるのは延命寺遺跡の出土品です。26点という出土量の多さもそうですが、なんと火鑽臼と火鑽杵が建物内で見つかっているのです(写真2、3)。さらに火鑽臼の上に火鑽杵が乗った状態で見つかることも珍しく、貴重な例です。

火鑽臼のかたち

火鑽臼には「①穴がたくさんあるもの」(写真3)「②穴が1～2個程度のもの」(写真4)があります。例えば、延命寺遺跡では、②のような形態の火鑽臼が7点見つかっています。①の形態は10数個穴を開け板の隅々まで使用しているのに対し、②は長い板ですが穴が2つしかなく、そのうち1つは使用していないものが多数を占めます。これらは何を意味するのでしょうか。例えば日用や祭祀用などそれぞれ異なる目的で使用された可能性も指摘できます。今後検討を進めたいと思います。

現代人と同じように、古代人にとっても火は身近なものだったことでしょう。発火具の視点から、昔の生活を覗くことができれば良いと思います。

(葭原佳純)

【参考文献】高嶋幸男『火の道具』柏書房1985



写真3 火起こし道具 延命寺遺跡(飛鳥時代)



写真4 火起こし道具 延命寺遺跡(奈良時代)



埋文
コラム

わが町の文化財紹介 ー見附市ー

平安時代の文字 ～上田遺跡～

上田遺跡は見附市鳥屋脇町に所在する平安時代の遺跡です。2000（平成12）年、5,000㎡を対象に発掘調査を行った結果、様々な遺構や遺物がみつかりました。

現在、遺跡とその周辺は水田地帯ですが、かつては遺跡の北側を流れる刈谷田川の形成した自然堤防（周辺よりやや高い場所）に立地していました。さらに、遺跡の南側には「八丁潟」という広大な沼沢地が広がっていたと考えられています。

発掘調査では、掘立柱建物跡（27棟）や建物を囲む溝、そして井戸（11基）などがみつかりました。これらの遺構からは平安時代（9世紀後半～10世紀代）の須恵器や土師器が数多く出土しています。出土した須恵器には甕・壺・横瓶といった貯蔵用の容器のほか、坏・蓋などの食膳具があります。土師器には甕・鍋などの煮沸具や坏などの食膳具です。これらの須恵器・土師器の食膳具には文字の書かれた「墨書土器」、「漆書土器」、

「刻書土器」と呼ばれるものが296点もありました。坏や蓋の内側や外側には、「寺万呂（人の名前）」「山」「区」「越」「安」といった様々な文字や記号が描かれており、当時の人たちの生々しい筆遣いを見て取ることができます。ほかにも鋤・曲物・箸などの生業や生活に必要な木製品がみつかりました。また、見附市では初めて「木簡」が出土し、当時の出挙制度に関する記録であることがわかりました。これらの出土資料は2006（平成18）年に見附市の文化財に指定されました。

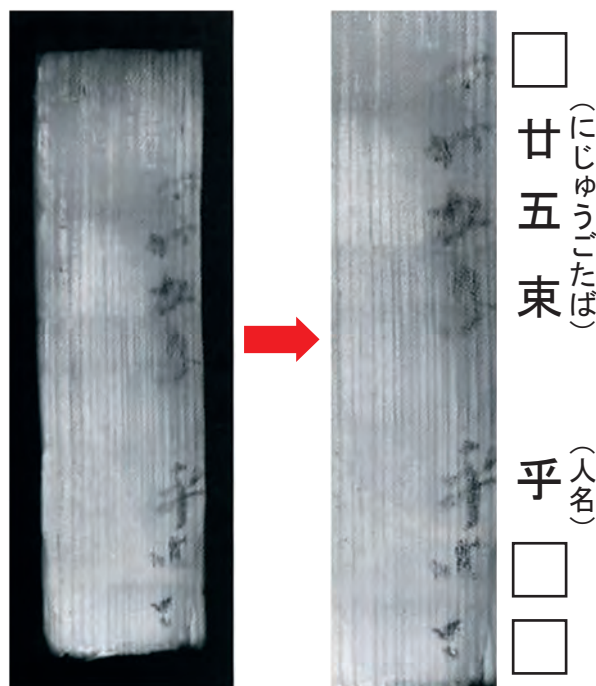
上田遺跡がある見附市鳥屋脇町には、奈良県にある東大寺が所有していた「土井莊」が存在していたのではないかと考えられています。遺跡から出土した墨書土器や木簡などの文字資料や、復元した遺跡の立地環境などをみると、莊園に関わりの深い場所であったことが窺えます。

上田遺跡から出土した土器は、見附市民俗文化資料館（みつけ伝承館：見附市学校町2丁目7-9）で展示しています。お近くにお越しの際はぜひご来館ください。

（見附市教育委員会 田中真理）



上田遺跡の墨書土器（撮影：見附市）



上田遺跡の木簡（赤外線写真）

□
廿五東
(にじゅうごたば)

□
平
(人名)

□

□



県内の
遺跡・遺物
115

小栗山不動院経塚出土品

昭和37年3月29日 新潟県指定文化財
遺跡所在地：見附市小栗山町林割1788の甲
遺物保管：不動院、見附市

こぐりやまふどういんきょうづか みつけしこぐりやままち
小栗山不動院経塚は見附市小栗山町にある不動院の背後に連なる標高約30～70mの丘陵上にかつて存在した塚です。経塚とは平安時代末期に經典と仏具類を埋納した塚のことです。丘陵上にはA～C 3基の塚とDの盛土がありました。不動院は1574（天正2）年の「安田検地帳 寺社領」に記された11か寺の一つで、背後の丘陵は七所の嶺として七所権現を祀る霊地とされてきました。

写真のA塚の遺物は1945（昭和20）年、松根油採取中、偶然に発見されたもので、大型の陶製壺が倒立した状態で出土し、その中には銅製仏像1く、青白磁合子1口、経巻軸冠2個、銅製蝶鳥山吹文鏡1面と漆塗の剥片や鉄片が埋納されていました。漆塗の剥片と鉄片以外は1962（昭和37）年に新潟県指定文化財となりました。A塚の陶製壺は珠洲焼とは胎土、成形、焼成に違いがあることから、珠洲以外で作られたもので、時期は12世紀後半と考えられています。また共伴する銅製蝶鳥山吹文鏡からもA塚は12世紀代に造られたものとされています。

B、C塚とDの盛土は1960（昭和35）年に発掘調査が行われました。B、C塚は葺石でおおわれ、ともに陶製片口を蓋とした陶製甕（珠洲焼）が出土しました。B塚の甕は12世紀後半、C塚の甕は13世紀前半と考えられています。さらにB塚からは錆びた直刀の先端1点と漆塗の剥片、塚の南西側からは須恵器の甕胴部片と錫箔片が出土しました。またC塚からは直刀の一部と完形の直刀一口、刀子一口が見つかりました。塚の時期は出土した陶製甕（珠洲焼）からB塚が12世紀末頃まで、C塚が13世紀代と考えられています。なおD

もりつち ぼしんせんそう ほうだいこうちく
の盛土については戊辰戦争時の砲台構築によるものと判断されました。

しかしA～Cのいずれの塚からも経筒は出土しませんでした。さらにB、C塚では納経に伴う遺物すら見つかりません。A塚については出土した遺物から経塚と判断されましたが、B、C塚については経塚関連の遺物を伴わない経塚であり、新潟県内でも特異な経塚とされています。

なお、当経塚およびその出土品についてのご意見・ご質問等はみつけ伝承館（0258-63-5557）までお願いいたします。

（見附市教育委員会 安藤正美）



A塚出土の新潟県指定文化財（撮影：見附市）



埋文にいがた 第117号

令和4年3月18日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL：(0250)25-3981 FAX：(0250)25-3986

E-mail：niigata@maibun.net URL：https://www.maibun.net/

